〔文学篇〕
【論文】

遁村李集の志向する隠逸の心

The Hermit Heart of Dun Chon Yi Jip

朴　美子

Park Mija

要旨（Abstract）

本论文中可以看到以往研究李集的论文中很少见到的：其多病人生中所隐藏的意义以及关于其隐逸之心的考察。李集的人生是有着逃难经历、贫困生活和不如愿官场的坎坷一生。对于被世俗折磨得身心俱疲的李集来说，最大的安慰是自然。本论文可以探知到一些当时生活不如意的文人的侧面。

キーワード（Keywords）

隠逸、李集、多病、超越、菊、蓮、舟

序

高麗末から朝鮮時代にかけて活躍した文人たちはそれぞれ独自の生活を送っていた。例えば、李穡・鄭夢周・李崇仁らは、号に「隠」を用いて牧隠・圃隠・陶隠と名付けており、陶淵明（三六五～四二七）の菊に関心を持つ、家に池を作って蓮を愛でる詩文が見られる。彼らは朱子の性理学を学んでおり、陶淵明に憧れつつも、世間を離れて菊を愛でるよりは蓮を愛でながら世間を忘れようとした。それは蓮によって君子を表した周敦頤（一〇一七～一〇七三）の影響によるところが大きいためである。また、漁父の生き方に憧れていた文人も見られるが、隠逸の心には隠者漁父の影響があり、船に乗って世間を忘れようとしていた。[1]

ところで、高麗末期の文人の中にはその人生が自分の思う通りにならなかった人も当然いる。李集（一三二七～一三八七）もそのうちの一人である。李集は剛直な性格による避難生活、それに伴って強いられた貧しい生活、思う通りにならなかった官職など、波乱の人生を送っている。

本論ではこれまで研究論文[2]には殆んど見られない、李集の多病に

隠された意味、隠逸の心などについて考えたいと思う。この論を通してこの時代を生きた文人の隠逸生活の一面を窺うことができよう。

なお、李集の作品については主に『韓国文集叢刊』（民族文化推進会、一九九一、十一）「遁村雑詠」を利用しており、必要に応じて『高麗名賢集』にある「遁村先生遺稿」をも用いた。

第一章　生涯と時代背景

吳世玉によれば、李集の初名は元齢、号は墨巖齋、遁村、本貫は廣州である。一三四七（二十一歳）年に進士試に合格し、一三五五（二十九歳）年には文科丙科に合格する。一三六八（四十二歳）年の秋、辛旽を論罪したことが災いとなって、慶尚道永川に逃げて崔元道の家で寓居する。一三七一（四十五歳）年の冬に辛旽が逐出されると開城に戻り、龍首山の下で起居する。その時に、名前を集に直して、字を浩然、号を遁村とした。一三七四（四十八歳）年の夏には慶尚道按廉使田祿生に従って合浦に出陣する。その後、判典校寺事に除授されたがすぐに辞職する。一三八〇（五十四歳）年に驪州の川寧に、一三八六（六十歳）年には廣州に起居し、開城に出かけて川寧に再び戻り、一三八七（六十一歳）年に卒した。朝鮮朝から議政府左贊成に贈職されることになる。

李集が辛旽により災いを被り、辛旽が逐出されると開城に戻った当時の政治社会状況を通して、辛旽はどのような人物で、李集はどのような生活をしていたのかをみてみよう。

李集が生きた高麗時代にはおよそ百年間続いていた武臣時代（一一七〇～一二七〇）があり、それが終わって蒙古つまり元の影響圏に入った。高麗の忠烈王（一二七五～一三〇八）は、国家の安定と王権の伸長に全力を尽くしたが、この時期には政治の支配層に二つの勢力が存在していた。一つは従来から閥族といわれた貴族の権門勢家で、もう一つは下級官僚や郷吏のいわゆる中小地主の子孫で科挙に合格して出世した新進士大夫の勢力である。忠烈王が官制を改定する際には権力を行使して自分の派の地位を高めようとする権門勢家側が、一方、忠宣王（一三〇九～一三一三）が人事行政と農荘の問題を指摘する際には新進士大夫側が、それぞれの立場を持して対立した。この時までは権門勢家側の勢力が強かったために、農荘・奴婢など政治経済面の問題は改革できないまま失敗に終わった。

しかし、恭愍王（一三五二～一三七四）が反元改革政治を行なったことにより、これが新進士大夫側の主張する反元政策と一致することもあって、権門勢家を押さえるきっかけとなった。恭愍王はいくつかの改革をおこなう際に、どちらの側にも属していなかった僧侶辛旽（？～一三七一）をあえて登用した（一三六五）。辛旽は弱体化した王権の伸長をはかり、農荘の弊害を指摘して改革機構を設置するなど、政治経済面を中心に改革を行なったのである。

ところが、権門勢家の攻撃を受けて恭愍王が暗殺されると、結局はこの改革も失敗に終わってしまった。しかし、この時にはすでに新進士大夫が国事を論じる位置にまで登っていた。恭愍王が反元政治を行なったということは親明政策を行なったことになる。ここに新たに生じたのが親明と親元との対立である。この時に李仁任（？～一三八八）が現れる。彼は辛旽の下で改革政治に参加した郷貢進士から登第して宰相にまで登った人物である。本来は新進士大夫の出身であった彼は、恭愍王が暗殺されると、十歳の禑王（一三七五～一三八八）を立てて権力を自分の手にいれた。そしていままで行なってきた政策を変えて、当時政権を握った権門勢家の政策に基づいて親元政策を敢行した。このことで今度は新進士大夫の反発を

買った。この時に新進士大夫の李穡・鄭夢周・李崇仁・吉再等が左遷されるなど、李仁任ら執権者の権力の乱用はますます激しくなっていった。李仁任の部下崔瑩は自分の上官ではあるが、政治面ばかりでなく経済社会面の混乱を憂えて武将李成桂の助けを借りて李仁任らを追い払った。禑王十四年（一三八八）の時である。しかし、二人の間には大きな隔たりがあった。身分においては崔瑩が権門勢家で、李成桂が新進武将であるが上に、考え方も違っていた。即ち、李仁任の処理問題や明・元に対する政策に違いが出たのである。この時李成桂が遼東攻伐の威化島から回軍して崔瑩を左遷して実権を握ったが、王権を巡って問題が現れた。即ち、禑王の子昌王を立てようとする側と、李成桂を立てようとする側の対立である。前者は李穡・鄭夢周・李崇仁・吉再などで、後者は鄭道傳・權近などであるが、各々の主張から穏健改善派と急進改革派と名付けられている。そして、最後は実権を握った急進改革派の李成桂が弱い権門勢家を圧倒して新しく王朝を建てる。

結局、辛旽は権門勢家側と新進士大夫側の反発を受けて恭愍王二十年（一三七一）に処刑されたのである。

一方、武臣の乱が終わっても農荘拡大は変わらなかった。王室は無論のこと、引退した官僚さえも土地の兼併を行なった。歴代の王が「整治都監」（忠穆王三年、一三四七）「田民辨整都監」（恭愍王十五年、一三六六）などの機関を設けて土地の調整に取り組んだが、失敗に終わった。その後、恭讓王三年（一三九一）には農荘を没収する新しい科田法が制定された。科田法は権門勢家や王室におよんでこれを再編成をしたので、国家の財政は無論、新進官僚の生活は安定を取り戻すことができたが、この時にはすでに高麗の存在はうすれていた。

もう一方、社会においては、蒙古の干渉期は百余年も続くが、崔氏政権後、この蒙古の干渉期には社会の身分が幾分緩和され、賤民層が教育機関や官界に進出するようになった。これは王に協力して信頼を得たり、あるいは元人の力を借りたりして行なわれていた。忠烈王の時には、武官及び文官の貴族階級にまで昇ったものもいた。そして、賤民層の郷・部曲・駅・津・館などの中には、良人になったものも現れた。だから、高麗後期には良民層の増加現象が見られる。一方、これらと反対に良民層の中には農荘主の権力によって奴婢に転落するものも現れた。忠肅王・恭讓王などはこのような身分の動揺と混沌をつとめて改善しようとしたが、効果はなく、後期の身分制度は改善されないままであった。[3]

李集の詩には当時の不安定な様子が描かれている。まず、生活面からの様子を見てみよう。

此是無乃豊年祥、玉樹參差明屋脊。
爲向隣家問老農、老農罪歳語刺刺。
雖云履霜至堅氷、秋天大雪異疇昔。
今年霜雪何太早、至今未畢種麰麥。
菽粟盈疇何暇收、縣官租税方急索。
三年不熟民艱食、又至於此眞可惜。
病夫所慮塡溝壑、更聞此語心煎迫。

（此れは是れ乃ち豊年の祥無く、玉樹参差として屋脊に明らかなり。為に隣家に向い老農に問う、老農歳を罪す語刺刺たり。霜を履み堅氷に至ると云うと雖も、秋天の大雪疇昔に異なる。今年の霜雪何ぞ太だ早き、今に至るまで未だ麰麥を種うを畢えず。菽粟疇に盈つるも何ぞ収むるに暇あらん、県官の租税方に急ぎ索むる。三年熟らずして民食艱し、又た此に至り真に惜むべし。病夫慮る所は溝壑を塡むることなる

に、更に此の語を聞きて心煎迫す）

（「己未九月十六日。雪中書懐。」全二十二句中第五句目から第十八句目まで）

詩題の「己未」は一三七九年、李集の五十三歳の時である。この詩の「履霜至堅冰」は『易、坤』の「象曰、履霜堅冰、陰始凝也、馴致其道、至堅冰也。（象に曰く、履霜堅冰、陰始めて凝り、馴れて其の道に致れば、堅氷に至るなり）」を引用している。霜を履むは九月、堅氷は十一月のように、禍や害などのわずかのものが次第に深くなっていくことを表す。まだ九月だというのに、他の年よりも早く大雪が降り、穀物の種は蒔き終えることができず、田畑には菽粟が実っても収穫する暇もない。農民は深刻な状態に天を責め嘆くも、役人は租税を急き立てる。農民は食がなく、これから何年にもわたって苦しまなくてはならない悲惨な状況が述べられている。この時期に政府は「田民辨整都監」を設けて土地の調整に取り組んだが、これが失敗に終わったことも生活に苦しむこととなった一因であろう。

凶荒師旅可憂傷、補敗今誰有藥方。
昨夜夢廻茅屋下、柴荊牢落石田荒。

（凶荒と師旅憂い傷むべく、敗を補うに今誰か薬方有らん。昨夜夢は廻る茅屋の下、柴荊牢落として石田荒る）

（「書事」）

この詩の第一句目の「師旅」は『論語』「先進」第十一の「千乗之國、攝乎大國之間、加之以師旅、因之以飢饉。（千乗の国、大国の間に摂まれて、之に加うるに師旅を以てす、之に因りて飢饉を以てす）」による言葉である。小さな諸侯の領国が強大な国に挟まれ軍隊の侵略を受ける。侵略を受けることにより飢饉が起こる。このことはすなわち、小国である高麗は天地の異変による災難と戦争によって荒れ果ててしまい、多くのものが傷んでしまった。昨夜、夢で故郷のかやぶきの家に帰ったが、粗末な柴の戸はうらさびれ石ころだらけ。田畑は荒れはてていた。こうなると農作業は不可能で、農民は大いに打撃を受けて飢饉の状態に陥ったであろうことも想像に難くない。

「師旅」の言葉が指すように、高麗末期になるにつれて外敵が侵入し、土地を強奪するなどの事件が頻繁に起こった。元の末期に河北省の永平で韓山童らが紅頭巾を被って反乱を起こした後、紅頭巾賊が二度、一三五九年（恭愍王八年）の十一月と十二月に高麗に侵入して略奪を行い、義州、静州、西京などを陥落させ、一三六一年（恭愍王十年）の十月には高麗の首都開城を二か月占領して略奪し、あらゆる蛮行を行なった。翌年の一月には高麗軍が反撃し、紅頭巾賊を開城から追い払ったが、高麗の被害は大きく、社会はさらに混乱に陥った。そのため、恭愍王が行った反元政治は色あせ、一三六一年には元の機関である征東省が再び設置され、管制などが元のものに復帰されるようになった。

李集の詩文にも外から侵入して害を加える賊の様子が描かれている。紅頭巾賊や海賊（倭寇）などが侵入して民が苦労する様子を見てみよう。

避賊山中作逸民、干戈滿地足風塵。
蒼苔古寺殘僧少、獨對庭梅憶主人。

（賊を避け山中に逸民と作り、干戈地に満ちて風塵足る。蒼苔の古寺残僧少なく、独り庭の梅に対して主人を憶う）

（「初到道美寺。寄龍頭住老」）

道美寺は龍頭住老が創った寺である。李集は賊を避けてここにしばらく泊まっていたが、第一句目の「賊」とは紅頭巾賊を指し、第二句目の「干戈」は高麗軍と紅頭巾賊の戦いによって高麗の地が戦乱の地になっていた様子がうかがえる。

聞君挈家室、避賊寓忠州。忠州問幾里、東望心悠悠。
賢郎告歸覲、忽忽增離憂。忠州連太白、盜賊尚未休。
郎歸丁寧語、愼勿苟淹留。我亦患寇至、都下已經秋。
都城人如海、衣食猶可謀。

（君が家室を挈げて、賊を避けて忠州に寓るを聞く。忠州幾里かと問う、東に望む心悠悠たり。賢郎帰り覲ゆるを告ぐるも、忽忽として離憂を増す。忠州太白に連なり、盗賊尚お未だ休まず。郎帰するに丁寧に語らん、愼しみて苟しくも淹留すること勿かれ。我も亦た寇の至るを患ふ、都下已に秋を経たり。都城人は海の如く、衣食猶お謀るべし）

（「送鄭先達悛歸覲忠州。走筆寄乃父同年」）

先達鄭悛が忠州に帰覲するのを送りながら書いたものである。忠州までの道のりは太白山脈に遮られており、行く先々には紅頭巾賊が潜んでいる。そういうところに家族を連れていく道は険しいものがある。一方、海寇は海岸線を越えて、都下、すなわち、都の中までに侵略しており、多くの人々が城郭に囲まれた都城に集まっていることに、李集もまたこれからの生活を案じていた様子が描かれている。ここに言う「賊」は山賊ではなく紅頭巾賊を、「寇」は海寇を表している。すなわち、この詩から鄭悛は内部の山に、李集は海岸線の水辺にあって、国の山河ともに賊にさらされていた様子が窺われるのである。

今度は海寇に関して具体的に見てみよう。李集の「敍懷四絶。奉寄宗工鄭相國」には、「時避海寇、寓川寧道美寺作。（時海寇を避け、川寧の道美寺に寓して作る）」と注が施してあり、李集が海寇を避けて寺に寓した際の詩である。当初、海寇は主に海岸地域に侵入して略奪を行った。彼らは三国時代から侵入してきたが、規模はそれほど大きくなかった。しかし、高麗時代の一三五〇年（忠定王二年）に入ってからはひどくなり、恭愍王と禑王の時には略奪の規模が次第に大きくなっていき、海岸地域だけではなく内陸までに範囲を広げていった。

交州地僻民居少、薄賦輕徭異四方。
海寇邇來采入阻、土人從此各離鄉。

（交州地僻にして民居少なく、薄賦軽徭四方に異なる。海寇邇来深く入りて阻む、土人此れ従り各おの郷を離る）

（「贈交州李按廉」全八句中第一句目から第四句目まで）

流離浪迹還同雁、慷慨悲歌不爲鱸。
何日樓船清海寇、賦詩飲酒與君俱。

（流離の浪迹も還た雁と同じく、慷慨悲歌するは鱸の為ならず。何れの日か楼船海寇を清ませ、詩を賦し酒を飲み君と俱にせん）

（「立秋日寄陶隱」全八句中第五句目から第八句目まで）

前者の詩は、交州は町の中心から離れた辺鄙な所で、交州の乏しい賦や軽い夫役は周りの他のところとは違う地域である。にも拘わ

らず、海寇が内陸まで深く侵入して広く占領しており、土人を阻んでいた。そのために交州に住んでいた土着人は故郷を離れて去ったとうたう。後者の詩は、今は海寇が樓船を占領して以前のように楽しい時間を過ごすことができないことを嘆いている。第六句目の「慷慨悲歌不爲鱸」の悲しい歌というのは鱸のためではなく、水辺に停泊している海寇のためであると述べているのである。さらに、「奉寄牧隱先生」の詩には「倭騎長驅耗幾州、漢南無處可淹留。（倭騎長駆し幾州を耗なう、漢南淹留すべき処無し）」とあり、倭人が幾つもの州を破壊し、久しくとどまるところがないと述べられており、内陸深くまで侵入してきて、漢の南方はほとんど占領されている様子が窺える。

以上のことから、李集が生きた時代は、内陸では紅頭巾賊に、海辺では海寇である倭寇に侵略され、高麗の人々は苦労が絶えなかった。李集もまた紅頭巾賊や倭寇を避けて他郷で仮住まいをするなど、苦労の多い生活を送ったのである。

高麗は元との関係が良好であった時には互いに協力しあい、海寇や紅頭巾賊に対応したために略奪の程度が弱かったが、元と明の間で揺れ動いた時期である高麗の末期には元とも疎遠となってしまい、海寇や紅頭巾賊は海岸地域や国境近くの地域だけではなく、次第に範囲を広げて内陸の深い地域まで侵略し略奪を行い、その上、民を殺したり火災を起こしたりと、民家や住民たちに大きな被害を与えていたのである。李集は海寇や紅頭巾賊の略奪を目にして心痛めていたのである。

第二章　苦難と人世からの超越

すでに吳世玉が述べているように、李集は長年逃避生活をしたことがある。また、李集の詩文をみると、病に苦しむ詩が多くみられるが、官職に未練を抱いている姿も見られ、彼の複雑な心情が窺える。李集は波乱の生活のなか、はかない人世を悟っていくのであるが、この章では李集のこういった人世の苦難を乗り越えてゆく姿をみてみたい。

第一節　逃避生活

河崙の『遁村先生雜詠』序に、「新脫逆旽之禍、來自南方。（新たに逆旽の禍を脱し、南方自り来たる）」とあり、李集の後孫が書いた「遁村雜詠補編」に、「與旽客蔡判書者同里、先生嘗憤旽賊、對衆大言論其罪狀、蔡遂密囑旽將加害。時進士公已耄老。先生乃乘夜竊負踰嶺而南。（旽の客蔡判書と同里なり。先生嘗って旽賊に憤り、衆に対し大いに其の罪状を言論す、蔡遂に密かに旽に将に加害せんことを嘱む。時に進士の公已すでに耄老たり。先生乃ち夜に乗じて竊かに負い嶺を踰えて南す）」とある。一三六八年、李集の四十二歳の時である。李集は辛旽を論罪したことで身の安全を図り、父親を連れてこれまで住んでいた場所から離れて慶尙道永川にある崔元道の家に寓居するようになった。この間に父親が亡くなって逃避先の永川の南、羅峴で葬事を行った。

崔元道の「贈」と題する詩には、以下のようにある。

慷慨當年淚滿襟、流離孝懇達幽陰。
漢山迢遞岡巒阻、羅峴盤回草樹深。
天占後先雙馬鬣、誰知君我兩人心。
願言世世長如此、須使交情利斷金。

（慷慨して当年に涙襟に満ち、流離す孝懇ろに幽陰に達す。漢山迢遞として岡巒阻み、羅峴盤回して草樹深し。天後

先の双馬の蠶を占う、誰か君我両人の心を知らん。願言す世世長きこと此の如きを、須らく交情をして利金を断せしむべし）

（「贈」崔元道）

この詩の「流離孝懇達幽陰」句からは親を大事にして連れていく様子が、「漢山迢遞岡巒阻、羅峴盤回草樹深」句からは逃避する時の険しさを乗り越えてゆく様子が描かれており、李集の孝行深さと当時の苦しい生活が読み取れる。

この詩の注に「崔公永川人、與先生同年。先生忤逆旽、禍將不測、擧室逃遁、匿崔公家。翌年先生父卒。公備殯斂事一如其親。又令葬其先塋傍、作此詩以贈之、後崔之諸宗人議掘其墳。公曰、我與李某、義有兄弟、情深骨肉、既許其葬、又圖其掘、吾不忍爲、其議遂止。李後世世榮顯、因爲南中名墓焉。（崔公永川の人、先生と年を同くす。先生旽に忤逆し、禍将に測らず、室を挙げて逃遁す、崔公の家に匿る。翌年先生の父卒す。公殯斂の事を備うること一えに其の親の如し。又た其の先塋の傍に葬らしめ、此の詩を作りて以て之に贈る、後に崔の諸宗人議して其の墳を掘る。公曰く、我と李某と、義として兄弟有り、情として骨肉に深く、既に其の葬を許し、又た其の掘るを図るも、吾為すに忍びず、其の議遂に止む。李の後世世栄顯たり、因りて南中の名墓と為す）」とある。李集は四年間避難生活をしたのであるが、その間に崔元道の家で泊まっていた。この注から崔元道と李集との友情がよくよみとれる。だからこそ、友の親を自分の親と同様に手厚い葬式を行ったのであろう。

李集と交流があった李穡・鄭夢周・李崇仁もこのことについて李集を思いながら触れている。李穡は「遁村記」に、「吾之遁于荒野、以避鷲城之黨之禍、艱辛之狀、雖鷙忍者聞之、不能不動乎色。雖然、吾之所以得至今日、遁之力也。（吾の荒野に遁れて、以て鷲城の党の禍を避くるや、艱辛の状、鷙忍の者と雖も之を聞くや、色を動かざる能わず。然りと雖も、吾の今日に至るを得し所以は、遁の力なり）」と述べて、李集が苦しくつらい辛旽の、鷲城の党の禍を乗り越えたことを評価していた。また、鄭夢周は「遁村卷子」に、「先生昔避仇、崎嶇竄荊棘、觀者爲酸辛。（先生昔仇を避け、崎嶇として荊棘に竄る、観る者為して酸辛す）」と述べて、李集の苦しみを悲しんでいた。

さらに、李崇仁は李集が四十八歳で合浦幕に赴くのを送りながら作った、「送李浩然赴合浦幕序」に、「負老親携持婦子、南走慶尚道、竄匿榛莽磵谷窮荒險阻之地、群麋鹿以居、不久用事者死、又四年辛亥而旽伏誅。其冬、君自慶尚來、見予玄化里第。予勞苦之、且問曰、流離顚沛、人處之一日不堪、況四年之久哉。（老親を負い婦子を携持し、南のかた慶尚道に走り、榛莽磵谷窮荒険阻の地に竄匿し、麋鹿に群して以て居り、久しからずして事を用うる者死し、又た四年辛亥にして旽誅に伏す。其の冬、君慶尚自り来たり、予が玄化里の第に見ゆ。予之を労苦し、且つ問いて曰う、流離し顚沛すれば、人之に処ること一日も堪えず、況んや四年の久しきをや）」と、李集の逃避時の苦労と辛い生活を詳細に述べて、死から甦ったと李集を称えていた。このように、李穡、鄭夢周、李崇仁らは李集が苦労したとき、辛旽により災いを被ったことを案じていた。

武臣の乱が終わっても農荘拡大は変わらなかった。王室の力を背景に辛旽など執権者の権力の乱用、僧侶の華やかな貴族生活および蓄財などはますます激しくなっていった。これに加えて、引退した官僚さえも土地の兼併を行なった。すでに述べた通り、歴代の王が「整治都監」「田民辨整都監」などの機関を設けて土地の調整に取り組んでも、農荘主がこれらの機関に参与して運営したために、実質的な調整は失敗に終わった。李集の四十二歳（一三六八年）の時

に、辛旽が田民辨整都監という制度を設置して、乱れた土地制度を改革したが、腐敗に走った執権者及び僧侶により改革は失敗に終わり国家財政においても大きな被害を受けた。その影響は民衆にまで及び民衆の苦難は絶えることなく困窮した生活を送らざるを得なかったのである。

そればかりではなく、李集は自分の座主であった李公遂が辛旽の執権後に免職され（『高麗史節要』（巻二十八、恭愍王十五年、六月）、その翌年には同年の鄭習仁が禍を被る姿を目にすることとなった（『高麗史』（巻一一二、鄭習仁傳）。そのために李集は大声で大衆の前で辛旽の罪状を論じて批判したが、それが原因で、辛旽の客である蔡判書の密告により結局のところ逃避生活をせざるを得なくなった。

第二節　病の多い生活

李集には、「杏村病中書事」「病中寄敬之」「道美寺病中雑詠」「病中書懐」、「丁卯歳季夏、臥病呈牧隠先生」などの作があるが、これらは詩題から、病中に書かれたことがわかる。このように李集の詩文には、多病、老病など、病の文字が多く用いられているが、これらの病はただの疾患であろうか、李集はどのような状況の中でこれらの文字を用いていたのか、具体的に見てみたい。

秋風滿天地、久客不勝悲。迷路何多日、還家復幾時。
病閑甘寂寞、年去見衰遲。信美非吾室、沈吟有所思。
（秋風天地に満ち、久客悲しみに勝えず。迷路何んぞ多日なる、家に還るは復た幾時ぞ。病閑にして寂寞に甘じ、年去りて衰遅なるを見る。信に美なるも吾が室に非ず、思う所有るを沈吟す）

（「道美寺病中雑詠」二首中第二首目）

去年重九鵠峯東、佩酒登高從我公。
臥病如今龍首下、無人喚起一衰翁。
（去年の重九鵠峯の東、酒を佩び登高し我が公に従う。病に臥す如今龍首の下、人の一衰翁を喚起する無し）

（「九日敍懐三首中」その一首目。呈牧隠。）

前者は病気のために道美寺でしばらく仮り住まいをし漢代の鐃歌の「有所思」を静かに口ずさみながら故郷を恋しがる様子が、後者は昨年は鵠峯山に登って祝ったのに、今年は病気でどこにも出かけることができないでいる一衰翁の自分を描いている。[4] 二首とも秋に書いたもので、年とともに衰えていくことと病気によってどこにも行けない寂しさと悲しみが描かれている。

また、李集の詩文には「老病」という表現がみられる。「立秋日寄敬之」には「江海無家客、山林有髪僧。焚香蘄道泰、對食願年登。睡起微涼入、吟餘老病增。玉人何處所、咫尺是驪興。（江海家無き客、山林髪有るの僧。香を焚き道の泰なるを蘄め、食に対し年の登るを願う。睡りより起れば微涼入り、吟じ余せば老病増す。玉人何れの処所ぞ、咫尺是れ驪興なり）」と、立秋の日に驪興にいる友人金九容に詩を送って、寒さのために老病が増すと述べられている。また、「用前韻。呈蔡判書、李中書。」二首中第二首目の結句（全四句）には、「自慙老病無詩力、未和霓裳一曲歌。（自ら老病の詩力無きを慙ず、未だ霓裳一曲歌に和せず）」と、老病のために詩力がないと述べられている。

さらに、李集は「多病」という表現も用いていた。「呈原功相國三首、其一賀新除三宰」に、「遁村多病關門日、相國新除喝道秋。

老子賀情非止此、黒頭過了鳳池頭。（遁村多病にして門を閉ざすの日、相国新たに除せられて喝道するの秋。老子情を賀うこと此に止むに非ず、黒頭鳳池の頭を過ぎて了う）」とあり、原功は禹玄寶（一三三三～一四〇〇）の字で、禹玄寶相国が三宰に除せられ、それを祝う詩である。第一句目「遁村多病關門日」の「關門」は門を閉ざす意で、自分が官職から離れたことを意味する。また「多病」はしばしばわずらう意であるが、肉体的な疾患よりは精神的わずらいではないかと思われる。第四句目「黒頭過了鳳池頭」の「鳳池」は宮中の池の名ではあるが、中書省がそのほとりにあることもあって、李集は若かった時に中書省の宰相ではなくとも官職についていた。そのために原功相國が新に三宰に除せられたことを祝いながら、その昔自分が若い頃に官職についていたことを想起していたことも考えられる。だとすると、この詩にみられる多病は官職と関連して発生した病である。また、第二首目の第一句目と第二句目（全四句）に「山南山北路縈回、扶杖衰翁幾往來。（山南山北路縈回たり、杖を扶く衰翁幾たびか往来す）」と述べられている。山南山北の路は曲がりくねっているが、そこを杖に扶けられ衰翁李集は幾ども往来すると言うのである。第一首から考えると、山南山北の路は官職への厳しい道のりを表すと解することも可能であろう。すなわち、李集の多病は身体の病気が多いことではなく、年を取っているものの、いまだに官職に未練があること、また、仕官への厳しさを表しているのではないだろうか。

また、「廣陵別鄭三峯、兼寄中原崔全州」には、「天涯流落兩書生、身世還如水上萍。且飲離亭一杯酒、勸君莫學屈原醒。遁村多病愛山林、何事清河久陸沈。應向中原重會面、丁寧說與老夫心。（天涯に流落す両書生、身世還た水上の萍の如し。且く離亭にて一杯の酒を飲み、君に勧む屈原の醒むるを学ぶ莫かれ。遁村多病にして山林を愛し、何事ぞ清河に久しく陸沈せる。応に中原に向いて重ねて会面し、丁寧に老夫の心を説与すべし）」と述べられている。この詩でみられるように、李集の多病は山林を愛するもので、太平盛大を表す清河に長く陸沈することはないと、経験を積んだ老心からのアドバイスを入れつつ、聖君が出現したら都で再会しようと中原の崔全州に親身になって説明しているのである。この詩からは李集の多病は体が弱く病気である様子を述べているとは考えられない。むしろ山林や清河を愛するやみがたい感情を多病という言葉に投影させているのである。

さらに、「奉寄京華故舊」に、「舊業漢陰洲、新居既上流。避人常抱病、携幼日消憂。已老風塵際、還驚草木秋。相思二三子、西望路悠悠。（旧業は漢陰の洲、新居は即ち上流。人を避けて常に病を抱き、幼を携えて日に憂を消す。已に風塵の際に老い、還た草木の秋に驚く。相思う二三子、西望すれば路悠悠たり）」と述べられている。舊業の漢陰洲は京華つまり都での官職を、新居つまり上流は今李集が家族と一緒にいるところを指す。ならば、「避人常抱病、携幼日消憂」の、人を避けて常に病を抱くが幼を携えて日に憂を消すことという言葉からは、病気があって人を避けるより、都での官職がうまく行かなかったことで人を避ける病と解釈したほうが妥当であろう。[5]

このように見てくると李集においては、病の文字表現には肉体的病気を表すばかりではなく、たいそう愛するものへの表現も病という言葉で表現されているのである。このたいそう愛するものへの表現には精神的な、いわば官職における不遇のイメージが含まれているのである。

第三節　人世からの超越

李集は現実世界、特に朝廷に対する未練を捨て去ることができなかったが、そこから自分の経験を通して人間世界のはかなさを目にし、人間世界に対応する策を見つけ出そうとした。

以下に李集が松都に来て初めて迎える秋に諸公に呈した三首の詩をみてみる。その第一首には、朝廷がある都にきても思うようにはならず、病気を抱えており、どこに行けばよいのかと悲しみを歌っている。また、第二首と第三首には微官でも官職につきたい人たちをあざ笑いしながらも、李集自身も朝廷への未練を捨てがたい気持ちが表れている。

神州積雨霽、客舎早涼生。情話思親戚、恩覃愧聖明。
五更孤鶴涙、四壁百蟲聲。抱病欲安往、東南尚甲兵。
（第一首目）

（神州積雨霽れ、客舎早に涼生ず。情話親戚を思い、恩覃聖明に愧ず。五更孤鶴涙す、四壁百虫の声。病を抱きて安くにか往かんと欲する、東南尚甲兵なり）

已去復來此、生涯漸覺難。病妻愛床褥、老婢苦盤餐。
日月蟻旋磨、功名魚上竿。可憐豚大輩、碌碌戀微官。
（第二首目）

（已に去りて復た此に来たり、生涯漸く難を覚ゆ。病妻は床褥を愛し、老婢は盤餐に苦しむ。日月蟻は磨を旋らし、功名魚は竿を上ぐ。憐れむべし豚大の輩、碌碌として微官を恋ふ）

潦倒一狂夫、星星白鬢鬚。交遊已渙散、身世再嗚呼。
舊業荒三徑、僑居近九衢。却慙無寸廩、歲晚客京都。
（第三首目）

（潦倒たり一狂夫、星星たり白鬢鬚。交遊し已に渙散し、身世再び嗚呼す。旧業三径荒れ、僑居九衢に近し。却って寸廩無きを慙ず、歳晩京都に客す）

（「松都客居。初秋三首呈諸公。」三首）

この詩の第二首目の第一句目「已去復來此」と、第三首目の結句「歳晩客京都」は、第一章の生涯で述べたように、李集が一三六八（四十二歳）年に松都にいる頃、辛旽を論罪したことで災いを被り、松都から出て慶尚道永川に逃げて崔元道の家で寓居し、一三七一（四十五歳）年に辛旽が逐出されて松都に戻ったことを表す。第一首目に「恩覃愧聖明」とあるものの、結句に、「東南尚甲兵」と述べられており、甲兵があちらこちらにおり、落ち着かない様子が述べられている。また、第二首目には、戻ってからは一層生活が難しく、妻は病気で、老婢も食べ物がなく食事の準備に苦労する、愚かな者たちは功名を求めて人の後に付き従って微官を恋しがると述べられている。第三首第一句の「潦倒一狂夫」以下は、落ちぶれて何事も成し得ない自分の姿を詠じている。自分はもう白髪となり、交流した人々もバラバラになっていると身の上を嘆いているのである。帰省のかなわぬ故郷は荒れ果て、自分は相変わらず都近くで仮住まいをしており、官職についた人に与える禄もないので晩年に至っても都にいる自分を恥じると、都の住いでの生活や、仕官へ夢は程遠いことが述べられている。

これらの詩から李集は官職に恋々としている人々を憐れむべきものとして扱いながら、自分もまた官職につくことなく都で生活に苦しむ憐れむべきものとして描いているのである。また、「自詠」詩においても、第一、二句目（全八句）に「倦客悠悠行路難、弊裘羸

馬宦情闌。（倦客悠悠として行路難く、弊裘羸馬宦情闌く）」と、官職の道は厳しく、破れたかわごろも、疲れ果てた馬からは長い間客寓の身であった様子が窺え、李集自身の宦情に疲れはてている様子が表れている。逃避生活から戻ってみても相変わらず世間は厳しく、官職への道は明るいものではなかったことを嘆いているのである。[6]

①人世風波沒復浮、已看五十二春秋。
　雁聲落日江村晚、閑詠新詩獨倚樓。
②何須騎鶴上楊州、大隱王城百不憂。
　因病杜門雖屏跡、傾都冠蓋盡公侯。
③林亭去夏日陪遊、扶杖過從小徑幽。
　病起江濱誰與語、慨然西望艤扁舟。
④世間富貴等雲浮、寄傲閑居穩送秋。
　午睡覺來聞剝喙、滿山黃葉下書樓。
⑤十年旅食帝王州、桂玉艱難賦百憂。
　莫道海山無去路、從今辟穀學留侯。
⑥淵明歸去絶交遊、生事蕭條地轉幽。
　紅葉蒼苔尋古寺、清風明月弄漁舟。

（①人世の風波没し復た浮く、已に五十二の春秋を看る。雁声落日江村晩れ、閑かに新詩を詠じて独り楼に倚る。②何んぞ須いん鶴に騎りて楊州に上るを、大隠は王城にて百も憂えず。病に因りて門を杜じ跡を屏くと雖も、傾都冠蓋尽く公侯。③林亭去夏日に陪遊し、杖を扶けて過従す小径は幽かなり。病より起き江濱誰とともに語らん、慨然として西のかた扁舟を艤するを望む。④世間の富貴雲浮に等し、寄傲閑居し穏やかに秋を送る。午睡より覚め来たりて剝喙を聞く、満山の黄葉書楼より下る。⑤十年旅食す帝王の州、桂玉艱難百憂を賦す。海山に去路無きを道う莫かれ、今従り辟穀し留侯を学ばん。⑥淵明帰去して交遊を絶ち、生事蕭條として地は転た幽なり。紅葉蒼苔古寺を尋ね、清風明月漁舟を弄ぶ）

（「次牧隱先生見寄詩韻」）

この詩は李穡から送られた詩に次韻したもので、六首からなる。第一首第二句目の「已看五十二春秋」から李集の五十二歳の作とみられる。第一章の生涯で述べたように、李集は一三七四（四十八歳）年夏に慶尚道按廉使田祿生に従って合浦に出陣し、その後、判典校寺事に除授されたがすぐに辞職した。一三八〇（五十四歳）には驪州の川寧で生活していることから、辞職した後に書いたとみられる。第五首目において、李集は以前十年という長い間都で過ごしており、今は病で世間から離れて家の門を閉めている。薪と米は桂や玉のようにとても貴重であるために手に入りにくく、生活するのに大変困っている。「辟穀」の言葉通り、官職の禄はなく、木の実などを食べながら留侯張子房の養生術を学ぶきわめて質素な生活である。

この詩は彼の人生のすべてを表しているようにも感じられる。「何須騎鶴上楊州、大隱王城百不憂」句からは、仙人になって鶴に騎って楊州に上っていく必要などなく、世俗を超越して俗事に乱されることのない隠者、大悟徹底した隠者は何の憂いもないのだという。李穡を指すと思われる大隠は「小隠は陵藪に隠れ、大隠は朝市に隠る」と、『文選』「反招隠詩」にある言葉で、優れた隠者は山林に隠れる必要はなく、世間の中に住んでも超然としているという。「人世風波沒復浮」「世間富貴等雲浮」などの句からうかがえるように、人世は浮き沈みがあり、世間の富貴は浮き雲のようにはかないものである。李集はこれまでの人生を振り返りながら、人間の世のはかなさを悟り得たのではないだろうか。[7]だからこそ、彼は世間や官職などに恋々とすることなく、陶淵明のように帰去来を詠じて、

清風明月の中で漁舟を浮かべながら自然とともに生きようと決心したものとみられる[8]。李集が自然とともに漁船を描いているのは、隠逸により自然の流れに寄り添いたいという感情の表れであり、人間世界を超越したいという願いの表れとみることができる。次章では李集の自然とともに生きる隠逸について具体的にみてみたい。

第三章　隠逸の心

李集の詩文には陶淵明に関する詩が見られる。陶淵明における「菊」は隠逸を表すのに欠かせない。陶淵明は「菊」を愛でていたし、隠逸の代名詞のようなものであるからだ。李集もまた菊を用いた詩を残している。李集の菊に対するイメージはどういうものなのか、李集には当時流行だったと思われる他の文人が作った池に蓮を植えて愛でるような詩はあまり見られない。その理由は何だったのか。さらにまた、李集が舟遊びを好んだ理由などについて考えてみたい。

第一節　菊

筆者は『韓国高麗時代における陶淵明観』において、「李集の詩歌を見ると、陶淵明の『帰去来辞』を思う気持ちが歌われているのは、彼が五十歳以後のことである。これは職を辞して隠遁生活に入って以後のことに当たる。その詩に『次牧隠先生見寄詩韻六首』其六や、『次陶隠詩韻三首』其三などがある。李集が何故、職を辞して田園に帰ったのかは不明であるが、おそらく官界の汚れた様子を見てそこを離れようとした気持ちは陶淵明と変わりがなかったであろう。そして、田園に帰って世間を離れ、隠遁生活を送ったのであろう。しかし、陶淵明の『帰去来辞』を歌いつつ、その喜びはあまり見られない。」と考察した[9]。

陶淵明を詠じた詩には、すでに第二章で述べた「次牧隠先生見寄詩韻」詩の「淵明歸去絶交遊、生事蕭條地轉幽」や、「次陶隠詩韻三首」詩の其三の「旅牕風雨重陽過、三復一篇歸去來。（旅窓の風雨重陽過ぎ、三たび一篇の帰去来を復す）」などがある。それでは、李集は陶淵明と菊をどのように描いていたのかについて見てみよう。

李集の「敍懷四絶。奉寄宗工鄭相國」四首の注に「避海寇。寓川寧道美寺作。」と述べられており、第一首目の注に「宗工田莊在道美寺北（宗工田莊は道美寺の北に在り）」とある。鄭相國は鄭道傳（一三四二～一三九八）を指し、鄭道傳の田莊が李集が泊まっているところから遠くない所にあったように見られる。

當年靖節愛吾廬、松菊秋風興有餘。
三徑如今已蕪沒、候門稚子望巾車。
（當年の靖節吾が廬を愛し、松菊秋風興余り有り。三径は如今已に蕪没し、門に候つ稚子巾車を望む）
（「敍懷四絶。奉寄宗工鄭相國」四首中その一首目）

この詩は陶淵明の「三逕就荒、松菊猶存」句を意識して作ったものと見られる。陶淵明は田園に帰って『帰去来辞』を残しているが、陶淵明が役人生活を辞めて故郷の田園に帰えって庭を見下ろすと、三径は荒れかけているが、松や菊は昔のまま残っていた。即ち、世が変わり住まいも変わっても、「松」と「菊」だけは変わらないでいる。その姿を見て、陶淵明は心が落ち着いたものと見られる。李集はこのことを思い浮かべていたと思われる。陶淵明は「松」「菊」を眺めながら、そこに隠士の生活への憧れを託していたが、また「三徑」は庭に三つの小道があり、後に隠者の住むところとして用

いられている。この詩から李集もまた世俗を離れた隠士となり、それにふさわしく生きていることを鄭道傳に伝えていたのではないだろうか。

鮮鮮霜菊慰幽懐、一日東籬繞幾回。
既與老夫俱隠逸、天寒古寺亦能開。
（鮮鮮たる霜菊幽懐を慰め、一日の東籬繞ること幾回。既に老夫と俱に隠逸たり、天寒く古寺も亦た能く開かん）
（「道美寺晩菊」）

遁翁樗散已華巓、種菊看花只自憐。
晩歳也宜偕隠逸、殘秋最愛獨芳妍。
（遁翁樗散は已に華巓、菊を種え花を看只だ自ら憐れむのみ。晩歳もまた宜しく隠逸を偕にするに、残秋独り芳妍なるを最も愛す）
（「惜菊一首。呈河簽書。」全八句中第一句目から第四句目まで）

前者の詩は李集が道美寺で過ごした頃に書いたもので、「菊」「東籬」「隠逸」の言葉は陶淵明の「飲酒」（二十首、其五）詩、「採菊東籬下、悠然見南山」句を連想させる。「飲酒」詩もまた陶淵明が田園に帰ってからの作である。その詩は、「結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然見南山。山氣日夕佳、飛鳥相與還。此中有眞意、欲辨已忘言。（廬を結んで人境に在り、而して車馬の喧しき無し。君に問う何ぞ能く爾るかと、心遠く地自から偏。菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る。山気日夕佳なり、飛鳥相与に還る。此の中に真意有り、弁ぜんと欲するも已に言を忘る）」とある。陶淵明の隠遁生活は心身ともに自然とともに生きることである。世俗から離れて自然と向き合っているうちに、人間のあるべき真の姿を発見するといったおだやかな生活である。李集も陶淵明のように世俗から離れた自然の中で隠逸の生活を詠じているのである。菊を眺めつつ、菊を愛でながら陶淵明の隠逸を思い浮かべていたと思われる。また、後者の詩にも「菊」と「隠逸」が強調されている。しかし、河崙に送ったこの詩中の「自憐」という言葉からは、陶淵明の「帰去来辞」を歌いつつ、その喜びは感じられない。

李集の「敍懐四絶。奉寄宗工鄭相國」に、「時避海寇。寓川寧道美寺作」とみえる注から、海寇を避けてしばらく川寧の道美寺に寓していたこと、また「道美寺病中雑詠」の詩（三首中第一首目の第一、二句目に、「江頭野寺似村居、久寓還疑是我廬。（江頭の野寺村居に似、久しく寓すれば還た是れ我が廬かと疑う）」とあることから、病のために道美寺で長く泊まっていたことが分かる。つまり、李集の驪州の川寧にある道美寺での生活は菊を愛でつつも、一方では海寇を避けるため、一方では病気のため、すなわち不安定な状況に置かれていたために、この時期の李集の「帰去来」には喜びがあまり見られないのである。

第二節　蓮

安珦（一二四三～一三〇六）によって性理学が導入されるようになると、李穡は安珦の思想を受け継いで性理学をもっとも重視した。大司成となってからは、鄭夢周、李崇仁などを登用して性理学の発展に貢献した。李集と交流があった李穡、鄭夢周、李崇仁らは陶淵明に憧れつつ、世間を離れて菊を愛でるよりは蓮を愛でながら世間を忘れようとした。それは宋の時代の儒学者周敦頤（一〇一七～一

〇七三）の「愛蓮説」（『古文眞寶』後集、説類）の「予謂、菊花之隱逸者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也。（予謂う、菊は花の隠逸なる者なり、牡丹は花の富貴なる者なり、蓮は花の君子なる者なり）」によるもので、周敦頤は水陸にある数種類の草木の花を愛でていながらもとりわけ蓮の花を高く評価しており、蓮が泥水中にあって泥に染まらないところから蓮を「花の君子」とたたえている。即ち、李穡らは蓮が君子を表すことから、菊を愛でるよりは蓮を愛でながら世間を忘れようとしたためである。[10] 李集の詩文は残っていないために詳細は述べられないが、『遁村雑詠』の中に李集の蓮を詠じる詩は以下の他にほとんど見られない。

滿池荷藕正時哉、獨繞池邊日幾回。
忽値白衣來送酒、開尊徑醉臥蒼苔。
（池に満つる荷藕正に時なるかな、独り池辺を繞ること日に幾回。忽ち白衣の来たりて酒を送るに値い、尊を開き径に酔い蒼苔に臥す）　（「謝金善州惠酒」）

この詩は善州の金惠が送った酒に感謝するものである。金惠はどのような人物かは明らかではないが、「忽値白衣來送酒」の句からは陶淵明のことを思い出させる。『宋書』「隠逸伝」の陶淵明伝に「嘗九月九日、無酒、出宅邊菊叢中、坐久、値弘送酒、即便就酌、醉而後歸。（嘗て九月九日に、酒無し、宅辺の菊叢中に出で、坐すること久しうす、弘の酒を送るに値い、即便ち酌に就き、酔うて後帰る）」とある。これは劉裕の側近である江州刺史王弘から酒が贈り届けられたので、その場で飲んだという故事である。王弘が陶淵明に酒を贈り届けたように、金惠は李集に酒を贈り届けていたのである。

この詩に、「時寓法輪寺、寺有蓮池。（時法輪寺に寓る、寺に蓮池有り）」の注がある。寺院に蓮が咲いているのは当たり前かもしれない。ただ、陶淵明と関連する詩文を詠じている李集であれば、中国の南北朝時代に高僧慧遠が廬山にある東林寺の前の大きな「白蓮」の池に因んで「白蓮社」と名付けた結社を組織し、僧や学者を集めて仏教修業を行なっていたことを知っていたであろう。また、陶淵明の友人の多くが廬山の白蓮社に集まって当時の名僧慧遠に仏教を学んでいた。廬山は陶淵明の居住地と非常に近かったが、彼はその集まりに加わらなかった。『蓮社高賢傳』には、慧遠と白蓮社に加わる事を約束して廬山に行ったものの、しばらくして逃げ出してしまったという逸話が残されている。この逸話についても李集はすでに知っていた可能性がある。法輪寺に留まり、寺にある蓮池を何度も回る行動から考えると、美しい情景を愛でながら、白蓮社や陶淵明のことをも思い浮かべていたことも想像に難くない。

また、蓮は仏教の象徴であるが、当時李穡が大司成となってからは、鄭夢周、李崇仁などを登用して性理学の発展に貢献しており、「蓮」は仏教の象徴であるばかりではなく、儒教の思想面にまで及んで幅広く用いられるにいたった。李穡が五十歳（一三七七）の時、權希顔（?〜?）から頼まれて作った「葵軒記」（文藁巻三）には「風雨離披而蓮香益清、……。菊也隱逸、松也節義、蓮也君子」と、風雨の中で花を咲かせる蓮は香がますます清らかで、菊は隠逸、松は節義、蓮は君子であると述べられている。また、李崇仁の「送李生之水原」（『陶隱集』巻三）の第一、二句目（全四句）に、「樓下荷花滿水開、曾聞牧隱留題咏。（楼下の荷花水に満ちて開き、曾て牧隠の留題の咏を聞く）」と述べられている。李崇仁は、蓮が咲いた時に早々と李穡を迎えていっしょに花見をしたいと述べたり、荷花が開く楼の下で李穡がかつてここに留まって詩文を作ったことを聞い

て李穡のことを思っていたりする。李穡は楼を建て池を掘り蓮を植えてその景観を楽しみつつ詩文を作っていた。それは蓮の香りが高く清らかでかつ高尚であり、しかも目を楽しませ興趣を増してくれるからである。一方、濂洛の学に優れていると言われ、東方理学の祖とも称される鄭夢周は「食藕」（『圃隱集』巻一）に「愛花周氏曾留説、種實韓公亦有詩。（花を愛する周氏曾て説を留め、実を種えし韓公も亦た詩有り）」と述べており、鄭もまた周敦頤の「愛蓮説」を読んでいたことが分かる。[11]

このように見て来ると、李集が交流を持った李穡、鄭夢周、李崇仁らがこのように蓮を愛でている以上、当時流行していることを李集が知らなかったとは考えられない。[12] 李穡、鄭夢周、李崇仁ら三人が陶淵明を憧れつつ、世間を離れて菊を愛でるよりは蓮を愛でながら世間を忘れようとしていたことも知っていた可能性が十分にある。周敦頤の「愛蓮説」のように蓮が泥水中にあって泥に染まらないところから蓮を「花の君子」とたたえていることを知って、寺に見事に咲いている蓮池を何回もめぐったことからも、隠居している李集にすれば、蓮よりは菊のほうが切実なものであったとみるのが適切ではないだろうか。

第三節　舟

李集が惕若齋に送った詩の内容は主に水辺を中心としたものである。李集の詩に対して、惕若齋が「附次韻」する水辺の詩も多く見られるが、二人の水辺詩は驪州でのやり取りが多い。惕若齋は文科丙科に李集（一三五五、二十九歳）と一緒に合格した金九容（一三三八～一三八四）を指す。金九容の号は惕若齋、六友堂、字は敬之で、官職は三司左尹であった。一三六七年、李穡が大司成になった時に登用されて性理学の普及や発展に努めた。金九容の『惕若齋學吟集』「先君惕若齋世係行事要略」の「世係行事要略」を見ると、「以言事竄于竹州、移母鄕驪興郡、閑居七年、以樂江山雪月風花之興、乃六友堂者自此始也。（言事を以て竹州に竄せられ、母鄕の驪興郡に移る、閑居すること七年、以て江山雪月風花の興を楽む、乃ち六友堂は此れより始まるなり）」とある。金九容は当時親明派であり、元の使臣が我が国を訪ねることに反対した。それが原因で竹州に左遷されたのである（一三七五年）。竹州に左遷され母鄕に移ってからの生活が七年間続いた。その間、金九容は自らを驪江漁友と号した。そして、江山雪月風花の自然をこよなく愛したのである。その後、一三八一年に左遷から官職に戻り、左司議大夫を授かった。一三八四年には中国の明国に行く途中、明国と外交的摩擦があったために逮捕されて、瀘州の永寧縣に流配中病死した。[13]

李集の「寄敬之」をみると、「聞說開新屋、前臨白鷺洲。柳陰深釣瀨、江色映書樓。傲世成高臥、懷親不遠遊。相期卜隣去、爲我理輕舟。（聞説く新屋を開くと、前は白鷺洲に臨む。柳陰釣瀨を深くし、江色書楼に映る。世に傲りて高臥を成し、親を懐いて遠遊せず。相期す隣を卜し去りて、我の為に軽舟を理めんことを）」と、金九容の新しい住まいは前には白鷺の洲に臨んでおり、柳が茂って陰をなすところでは深い瀨があり、釣りに適している。このことから魚釣りに慣れているように見られる。私のために軽やかな舟を用意すると約束してくれる詩句から、李集の船に乗ることへの期待が感じ取れる。李集が金九容の水辺で自由に生きる生活を羨ましく思っていたことが窺えるが、二人の親しい交流をも読み取ることができる。

李集は四十四歳（一三七一年）の時に逃避生活から戻ってきて奉順大夫・判典校寺事などの官職に就いたが、ほどなく職を辞した。そして驪州に赴き川寧（現在の驪州）で起居しており（一三八〇年）、そこで余生を送った。この詩はその時の作とみられる。李集の水辺

詩に次韻した詩は金九容だけでなく、李穡にもみられ、やはり親しい交流がうかがえる。李穡は、一三七四年、病によって職を辞し、朝廷に戻り（一三七五）、禑王の師傅となった（一三七七）。その次の年に川寧の驪江辺に田園を賜っていた（一三七八）。鄭夢周が殺される（一三九二）と、再び衿州、驪興（現在の京畿道驪州の古名）、長興に左遷された。そして、一三九六年、驪州の神勒寺にいく途中、驪江で世を去った[14]。

彼らの生涯に目をやると、李集、金九容、李穡の三人は自らの選択であれ、左遷であれ、病気や田園を賜ったことであれ、驪州の水辺の美しさに魅了されていたものとみられる[15]。また、彼らの驪州に関する詩のやり取りは一三七四年以降から本格的になったように思われる。そこで以下に三人のやりとりの詩を具体的に見てみよう。

①江樓高處是君居、隔岸相望十里餘。
一棹往來應數數、此間吾亦結茅廬。
（江楼の高処是れ君の居、岸を隔て相望むこと十里余。一たび棹さし往来すること応に数数なるべし、此の間吾も亦た茅廬を結ぶ）　（「寄敬之」）

②暴雨行雲拂曙流、據鞍歸路晚山稠。
世間蕭散誰如子、江北江南任去留。
草蟲聲裏客心驚、坐倚松牕到五更。
聞說上游魚稻美、有誰起我作閑行。
病中加病臥牛衣、問疾無人扣板扉。
寂寞歌魚誰解聽、江頭空見釣船歸。
（暴雨行雲曙を払いて流れ、鞍に拠る帰路晚山稠し。世間蕭散として誰か子の如く、江北江南去留に任す。草虫の声裏客心驚き、坐ろに松窓に倚り五更に到る。聞説く上游の魚稻美なるを、誰有りてか我を起し閑行を作す。病中病を加え牛衣に臥すも、疾を問いて板扉を扣くに人無し。寂寞として歌魚誰か解く聴かんや、江頭空しく釣船の帰するを見る）　（「寄敬之」）

③高梧一葉下庭柯、病客先驚鬢髮華。
流轉江鄉非舊隱、却來野寺是誰家。
（高梧の一葉庭柯に下り、病客先に鬢髪の華に驚く。江郷に流転するも旧隠に非ず、却って野寺に来たる是れ誰が家ぞ）
（「病中寄敬之」全八句中第一句目から第四句目まで）

この三首は李集が金九容に寄せた詩で、三首とも金九容の「附次韻」がある。①の詩は、金九容が江楼の高処に住まいを構えており、李集がいる岸から十里あまりの距離を船で何度も往来する。私もその間に茅葺の住まいを結んだと述べられている。「一棹往來應數數」と往来しているということは、李集が舟に乗っていたことがわかる[16]。金九容はこの詩に対して、「曾約黃驪共卜居、奔馳南北十年餘。如今始遂平生志、猶自江邊未搆廬。（曾て黄驪に共に居を卜すを約すも、南北に奔馳すること十年余り。如今始めて平生の志を遂ぐるは、猶自江辺に未だ廬を搆えず）」と次韻していた。ともに黄驪（（京畿道驪州郡の高麗時代の名）に住まいを構えようと約束したが、長い間約束を果たせず、今になってやっと平生の志が成し遂げられた。しかしなお水辺には住まいを構えることができないでいると答えている。このことから金九容の志が黄驪の水辺に住むことよりも他に官職への未練があったことが窺える[17]。

②の詩は李集が病に臥していながら誰も訪れる人がいない寂しい様子が詠じられている。世間は不安定であるが、金九容だけは水辺

で船に乗り水に任せて東西南北に行き来する自由な生活である。聞くところによれば上流では美味しい魚があるというのに私を連れて行く人は誰もいない。この詩で李集は他の漁父の声を聴きながら今は近くにいない金九容への恋しさと寂しさを描いている。金九容はこの以前李集を連れて一緒に出かけていたことが窺える。金九容はこの詩に対し、「稚子撑舟泝碧流、夜深移泊柳陰稠。草間蟋蟀啼無數、露冷衣寒未久留。解衣欹枕夢初驚、時有沙禽忽報更。意在汀洲佳處住、岸移山轉覺舟行。籬下維舟露濕衣、閑吟剝喙扣柴扉。（稚子舟を撑さし碧流を泝り、夜深くして柳陰の稠きに移り泊む。草間の蟋蟀啼くこと無数にして、露冷く衣寒く未だ久しくは留まらず。衣を解きて枕を欹て夢初めて驚く、時に沙禽有りて忽ち更を報ず。意は汀洲の佳処に住むことに在り、岸移り山転じ舟行を覚ゆ。籬下に舟を維ぎ露衣を湿らす、閑吟して剝喙と柴扉を扣く）」と次韻していた。この詩には水辺の美しいところに住み、夜から明け方にかけて、船に乗って岸と岸、山と山を回り、時間の流れにともない変化する周りの様子を描きつつ、あなたのところにも寄りたいと述べられている。これらの詩から二人は仲の良い友であったと十分推測できる。

③の詩には、李集が病で野寺で過ごしている様子が描かれている。金九容は、この詩に対して、「百年春夢付南柯、一陣新涼感世華。風月有期長作伴、乾坤乗興卽爲家。李侯不悟倉中鼠、杜簿猶疑盞底蛇。從此共成眞隱遁、莫將虛譽向人誇。（百年の春夢南柯に付き、一陣の新涼世華に感ず。風月期有り長く伴と作り、乾坤興に乗じ即ち家と為す。李侯倉中の鼠を悟らず、杜簿猶お盞底の蛇を疑う。此れ従り共に真の隠遁を成す、虚誉を将って人に向って誇ること莫かれ）」と次韻している。金九容は人生ははかない夢に過ぎない、自然がわが家だと、興に乗って自由に生きることへの賛美を歌っている。この詩には世間の、特に官職についている人々の考えが井戸の中のカエルのように狭く、びくびくと生活する様子を皮肉に描いている。この詩から金九容が李集に自然とともに真の隠遁をなそう、ここには人に自慢する虚しい名誉などないのだと李集を誘っている様子が窺える。

また、李集の「病中寄敬之」に「何日重携手、回頭水一方。安危書易達、來往病相妨。勝境三清洞、閑居四友堂。吾將就君住、終不老江鄉。（何の日か重ねて手を携えて、頭を回らす水の一方。安危書達し易くも、来往病相妨ぐ。勝境の三清洞、閑居の四友堂。吾れ将に君の住まいに就んとするも、終に江郷に老いず）」とある。李集が病の中にいながら金九容に送った詩である。優れた三清洞や閑静な四友堂、あなたの住む江郷に行きたいが、病のためにどこにも行けないと寂しさが述べられている。李穡はこの詩に対して、「□□寺示牧隱故次之」詩に、「江山成樂土、風物異他方。得句天機熟、營生野興妨。愛樓尋客舍、遊寺坐僧堂。老境眞忘世、同年幸在鄉。（江山楽土を成し、風物他方に異なる。句を得るは天機熟し、生を営は野興妨ぐ。楼を愛し客舎を尋ね、寺に遊びて僧堂に坐す。老境真に世を忘るるも、同年幸いにして郷に在り）」と次韻していた。李集は寺院で、私は故郷にいながら、晩年真に世間を忘れることができるのは、幸いにあなたと同じ年同じ場所にいるからだと、俗世間から離れて同じ仲間がいることに満足している様子が歌われている。

さらに、李集は驪江で楽しく心弾む生活をも送っていたようである。「李浩然見訪」には「夏遇驪江上、秋逢鵠嶺前。君狂猶钁鑠、我弱更沈綿。陋巷煙浮地、高樓岫際天。何如兩無事、到處共飄然。（夏に驪江の上に遇い、秋に鵠嶺の前に逢う。君狂にして猶お钁鑠たり、我弱くして更に沈綿たり。陋巷煙地に浮き、高楼岫天に際く。何んぞ両つながら事無きに如さんや、到る処共に飄然たり）」とある。

この詩は李穡の作で、ここの君は李集を指す。李集は事に熱中することが年老いても元気にいられる秘訣であるように、李集の驪江での生活は都での生活では見られない元気な姿だったことが読み取れる。また、「李浩然將歸舊居。僕欲從之。發爲長歌。」の結句（全二十六句）にも「毛輶有倫我在有無中、殘生哀哉如蟣蠓。浩然往矣修釣筒、我行亦趁桃花紅。（毛の輶きは倫有り我有無の中に在り、殘生哀れむべきかな蟣蠓の如し。浩然往きて釣筒を修む、我行くも亦た桃花の紅を趁わん）」とある。これまた李穡の作である。この詩では、李集自ら釣筒を修めるという頼もしい姿が描かれており、病気がちで寂しい時があるにせよ李集の驪江での生活は積極的で楽しさに満ちた生活であったようにみられる。[18]

これらの詩から共通にみられるのは、驪江の美しさに魅了されそこから楽しさを見つけ出している姿である。彼らにとって驪江は心の癒しの場であり、心を和ませる場所であった。晩年、李集は川寧に鳳棲亭を建てて後学の指導や詩作、農作業などをしながら、李穡（枕流亭）と金九容（六友堂惕若齋）と親しく詩作を交わし、互いに慰め合い心を通わせていた。[19]

それでは、ここで彼らが心を通わせていた理由を考えてみたい。

すでに述べたように、李集は自分の座主であった李公遂や同年の鄭習仁が禍を被る姿をみていて、辛旽を非難したことで逃避生活を送っており、一三七四年に合浦に出陣した後に、判典校寺事を授かったがすぐ辞職していた。金九容もまた親明派の立場から元の使臣が自国を訪ねることに反対したために左遷を余儀なくされた。また、李穡は王の師傅となったものの、鐵嶺衛問題が起こるなど慌ただしい官職生活を送った。つまり、彼らには親元や親明による様々な問題、朝廷に対する問題や失望などがあったとみられる。[20]

それでは上記のことに関連することがらを詩を通して具体的にみてみよう。

陶隱の「過廣州。憶李浩然。時在川寧之江村。」に「一年兩過漢山邊、復憶吟詩李浩然。宦路向來翻覆甚、好將身世付漁船。（一年両ながら漢山の辺を過ぎ、復た詩を吟ずる李浩然を憶ふ。宦路向来翻覆すること甚だしく、好し身世を将って漁船に付さん）」とある。李集は官職の道は元来ひっくり返るもので、この不安定さから身を漁船に寄せると李崇仁に告げたらしく、李崇仁自身もまたそのようにありたいと願っていた。李崇仁は李集が泊まっていた川寧の江村を通り過ぎながら、その昔、李集が不安定な官職から離れて漁船に身を任せて過ごしたことを思い出していたのであるが、ここに李集が船を好んでいた理由を窺い知ることができる。

また、李集は「淨土寺留別敬之」に「江海三年別、招提一夜同。對床言不盡、握手意無窮。掩亂愁千緒、飄蕭兩鬢蓬。干戈何日解、旅泊又秋風。（江海三年の別れ、招提一夜同じくす。床に対し言尽きず、手を握りの意無窮なり。乱を掩う愁千緒なるも、飄蕭として両つながら鬢蓬たり。干戈何れの日か解けん、旅泊又た秋風なり）」と述べており、この詩に惕若齋が次韻して「奔走雖相遠、艱難亦自同。仲宣悲世亂、阮籍哭途窮。江海孤飛雁、乾坤一轉蓬。悤悤又離別、回首碧溪風。（奔走して相遠しと雖も、艱難も亦た自ずと同じ。仲宣世乱を悲しみ、阮籍途の窮るに哭く。江海孤の飛雁、乾坤一転蓬。悤悤として又た離別、首を回す碧渓の風）」と述べている。李集の結句に、戦争はいつ終わるだろうかと、落ち着かない様子が旅人と秋風によってさらに寂しさが深められている。王粲と阮籍が世の乱れを嘆き悲しんだように、金九容自身も寂しい孤雁となって、不安定な乱れた世の中を嘆いているのである。

千載斯文久寂寥、一生行止樂漁樵。

春風到處花如海、痛飲狂歌託虚朝。
（千載の斯文久しく寂寥として、一生の行止漁樵を楽む。
春風到る処花海の如く、痛飲し狂歌して虚朝に託す）
（「醉題」『惕若齋學吟集』巻上）

この詩は金九容の作で、いつ作られたのかは明らかではない。詩題の「醉題」からは、実際に酒に酔って詩を作ったのかどうかは知ることができず、詩の内容から多く酒を飲んで酒に酔ったふりをして詩を作り朝廷を批判しているとも考えられる。また、結句は杜甫の詩「官定後戲贈」（『分門集註杜工部詩』巻十三）詩の、「耽酒須微祿、狂歌託聖朝。（酒に耽けりて微禄を須ち、狂歌して聖朝に託す）」の句をふまえたように見られる。杜甫のこの詩には微禄ながら官職についてからのことが述べられている。一方、金九容の詩は虚しい朝廷に託すという表現から金九容が朝廷を離れた時に書いたと推測できる。金九容は「醉題」詩で詠じたように当時の朝廷に失望していたが、しかし、左遷であるにせよ母郷驪興に帰ってからは一生の行止を漁樵を楽しみながら隠者として生きると表現しているのである。[21]

李穡もまた老年期の作である「歸來篇」の結句に「人生乘化有脩短、白頭何不歸去來。歸來歸來莫留滯、驪江春水葡萄醅。（人生化に乗じて脩短有り、白頭何んぞ帰去し来たらざらん。帰り来たらん帰り来たらん留滞すること莫れ、驪江の春水葡萄醅さん）」（「歸來篇」『牧隱詩藁』巻十三）と、「驪江」の春を恋しがっている。「驪江」は李穡が六十四歳の冬に滞在したことがあり、再びここを訪れたいという表現から、深い愛着を抱いていた場所と見られる。李穡は六十八歳の十一月に李成桂から朝廷に召された時に、亡國を悲しんで故郷に帰ることを志して朝廷に戻らなかったことがある。この時期に李穡の心はすでに朝廷に対する失望を感じていたのではないだろうか。そこで、李穡は世間のわざわいを避けて隠遁することを求めていたものとみられる。すなわち、李穡が「歸來篇」に託した心は、安定しない世間のわざわいを避けるためであったと分かる。[22]

以上、李集は金九容や李穡、李崇仁などとともに、紅頭巾賊や海賊倭寇の侵入と略奪、元明の交代期における不安な政治情勢によって被害を被っていた。そのために世間を離れて船に乗って自由に生きる、漁父となって自然とともに生きたいとの願望があり、互いの心を詩という媒介を通して分かち合いながら慰めていたのである。

ここで、李集が奉順大夫・判典校寺事などの官職に就いたもののほどなく職を辞したことと関連してさらに考えてみたいと思う。

策蹇京華路、眞爲後浩然。雖云明主棄、猶得故人憐。
旅舍含杯醉、直廬共被眠。無端交道熟、不覺到忘年。
（蹇を策す京華の路、真に後の浩然為り。明主に棄てらると云うと雖も、猶お故人の憐を得たり。旅舍杯を含みて酔い、直廬被を共にして眠る。端無くも交道熟し、覚えず忘年に到る）
（「謝陶隱諫議見訪」）

この詩は諫議李崇仁が訪れてくれた際に作られたものである。第二句目の「浩然」は無論李集の字であるが、中国の唐時代の詩人孟浩然（六八九～七四〇）を想起させる。孟浩然の名は浩、字は浩然で、李集の字と同じである。李集はこの中国の詩人孟浩然にかけて孟浩然の後人として表現していたと考えられる。それは第三句目の「雖云明主棄」が孟浩然のことに繋がるからである。孟浩然の「歳暮歸南山」（『孟浩然詩集校注』巻第三）詩に、「北闕休上書、南山歸敝廬。不才明主棄、多病故人疎。白髮催年老、青陽逼歳除。永懐

愁不寐、松月夜窗虚。（北闕上書を休め、南山敝廬に帰す。不才明主に棄てられ、多病故人に疎んぜらる。白髪年老を催し、青陽歳除に逼る。永懐愁えて寐れず、松月夜窓に虚し）」と述べられている。孟浩然は四十歳頃（七二八）に都に出て再度科挙試験に臨んだが及第できなかった。この詩は暮れに長安の終南山（仮住まい）に帰って、上京して科挙に受かることもできず、自分の才能が認められなかったことへの悲しみを描いたものである。孟浩然は朝廷に意見書を差し出して任官をめざしていたことが窺えるが、「不才明主棄、多病故人疎」は明主には棄てられ、多病により故人とも疎遠となり、失望して眠られず、月に照らされた松の木を虚しく眺めているだけだと詠う姿は甚だつらいものであったと十分推測できる。李集も同じく仕官への苦しみを述べているが、「猶得故人憐」と、幸いに陶隱がいることに安堵しているのである。

李集は若い時と思われるが、官職を求めて都で仮住まいをして暮らしたことがあり、すでに「呈原功相國三首、其一賀新除三宰」詩で述べたように若い時に官職についていた。その後、判典校寺事に除授されたがすぐに辞職し、一三八〇（五十四歳）年には驪州の川寧で過ごしている。孟浩然は四十六歳の時に山南道採訪使韓朝宗の推薦を受けて一時官職に登用される機会を得たが応じなかった。「採訪使韓朝宗約浩然偕至京師、欲薦諸朝。會故人至、劇飲歡甚、或曰、君與韓公有期。浩然叱曰、業已飲、逞恤他。卒不赴、朝宗怒、辭行。浩然不悔也。（採訪使韓朝宗浩然と約し偕に京師に至り、諸朝に薦められんと欲す。会ま故人至りて、劇飲し歓ぶこと甚だし、或いは曰う、君は韓公と期有らん。浩然叱りて曰う、業已に飲み、他を逞しく恤れむ。卒に赴かず、朝宗怒りて、辞じて行く。浩然悔いざるなり）」との逸話がある。李集が判典校寺事に除授されてすぐに辞職した理由は明らかではないが、官職に関して失望し辞職したことも考えられる。李集は陶淵明について「帰去来」を称賛しているが、陶淵明もまた五斗米というわずかな俸給のために、郷里の官吏に頭を下げることはしないと言って職を辞し、帰去来したのであった。[23]

筆者はすでに李集が多病と言った裏には精神的な面があると述べたが、孟浩然や陶淵明のように、朝廷や官職に失望して官職を辞めたことも考えられる。そして、孟浩然が官職につけなかったことで舟遊びを楽しんだように、[24] また、陶淵明が帰去来をして田園に帰ったように、李集もまた晩年にすべてを棄てて、驪州の川寧に帰去来して船に乗り、自然とともに過ごしたと思われるのである。

結

李集は高麗末の政権交代期の不安定の中、外敵の海寇や紅頭巾賊の略奪がある波乱の時代を生きており、権力者への論罪を糺したことで逃避生活を余儀なくされたが、逃避生活は彼の人生の転換点となった。後に、李集は『孟子』の浩然の気を用いて字を浩然として変えており、多病により生活にも変化が起こった。幸いに、李集の苦労を理解してくれる友人に恵まれて、彼らと喜怒哀楽をともにしながら日々を送ることができた。李集は多病ではあったが、驪江での生活は彼の心を和ませた。特に舟遊びは彼にとって楽しく心弾むひと時であった。先人が行った隠逸生活のように、世俗に心身ともに疲れた李集にとって最も慰めになったのが自然であり、自然のままに生きた陶淵明を慕い、隠逸を表す菊を愛で、舟遊びをしながら世俗を忘れようとしていたのである。

注

（1）拙著『韓国古典詩における隠逸の心とその生活』（風間書房、二〇一八年三月）参照。

（2）李集に関する先行論文をみてみると、林鍾旭の「遁村李集の詩に関して」（『語文研究』59・60号合、1988.12）と「遁村李集の詩文学研究」（『東皐学研究』第1輯、1997.2）には、生涯と作品、述懐詩、交遊詩、憫農詩、隠遁と参与の弁証法などについて述べられている。河政承の「遁村李集詩の品格研究」（『韓国漢文学研究』26号、2000.10）には、遁村詩の品格と諸様相を中国の司空図の『二十四詩品』及び栗谷の『精言妙選』などの詩話集を利用して論じている。崔光範の「麗末漢詩品格の一局面―平淡を中心として―」（『漢文学研究』15号、2001.2）、カンドンソクの「李集詩における孤閒の情緒と市隠の追求」（『東洋漢文学研究』39号、2014.8）、カンヘソンの「高麗末士大夫の交遊詩研究―遁村、惕若齋、圃隱、陶隱、三峯、陽村を中心として―」（『韓国漢詩研究』22号、2014.10）などがある。

（3）拙著『韓国高麗時代における「陶淵明観」』（白帝社、二〇〇〇年二月）第一章と重複するところがある。

（4）それ以外にも、「病餘身已老、客裡歳將窮。瘦馬鳴西日、羸僮背朔風。臨津氷合渡、華嶽雪連空。回首松山下、君門縹渺中」（「漢陽途中」）、「病臥無情思、僑居轉寂寥。敢希霑爵祿、自喜老漁樵。鳳闕凌霄漢、龍舟趁海潮。紅裙不解事、爭唱太平謠」（「病中書懷」）、「病枕凄涼雨送秋、殘燈明滅照深幽。家書別後煩黃耳、世事看來已白頭。尼父何妨遲去魯、張侯早識足封留。幅巾藜杖川寧曲、自愧如今訪舊遊」（「秋夜雨中書懷」）などがある。また、「秋風病客已華巔、令見歸僧一慨然。萍梗孤蹤猶不定、先生高臥達川邊」（「送龍頭席上。寄同年崔奉翊」）、「流轉川寧地、山川尚砥平。病中三伏盡、雨後一涼生。節物驚羈旅、風流憶老成。何時孤柳下、握手更論情」（「憶牧隱」）などがある。

（5）「庭柯黄葉落、天地九秋風。多病嗟爲客、寛懷賴有公。世情知毀譽、交態見窮通。且飲同年酒、功名兩鬢蓬」（「同年原功家。吟得四十字」）とある。この都の原功の家で描いた詩においても世情の厳しさを述べていながら多病の客となったことを嘆いている。

（6）「遊宦神州心已灰、茅簷曾向碧江開。旅牕風雨重陽過、三復一篇歸去來」（「次陶隱詩韻」）、「宦路崢嶸幾太行、眼看車轂易摧傷」（「杏村書事」）などがある。

（7）「厭貧求富是人情、何怪交游棄老生」（「寄同年崔散騎」）、「榮辱有時何慘戚、行藏信命且躊躇」（「訪鄭三峯漢陽村居」）とある。また、「吾衰不合人間世。要與龐公入鹿門」（「次陶隱詩韻」）、「京邑縱榮難可住、江山有約莫相違。……江鄉縹渺魚書斷、城闕深沈蝶夢稀」（「用前韻。呈李中書、蔡判書」）とある。さらに、「功名自古憂患餘。却被遁翁長嘘嘘」（「李途傳乃翁書。以詩答之」）、「人間富貴石火紅。甲第往往生蒿蓬」（「走筆奉寄遁翁」）、「天涯流落兩書生。身世還如水上萍」（「廣陵別鄭三峯。兼寄中原崔全州」）、「秋風又蕭瑟、世事易蹉跎」（「病中書懷」）、「強扶衰憊將安往、世事吾今已掃除」（「復賦前韻」）などがある。

（8）「共道帝鄉無限好。不如携幼早還家」（「呈廉知申事」）、「一年兩過漢山邊。復憶吟詩李浩然。宦路向來翻覆甚。好將身世付漁船」（「過廣州。憶李浩然。時在川寧之江村」）とある。

（9）前掲『韓国高麗時代における「陶淵明観」』第三章。

（10）前掲『韓国古典詩に見られる隠逸の心とその生活』参照。

（11）「味甜如蜜凉如雪、采采終朝出碧池。錯落滿盤堆玉質、飄搖迎刃散銀絲。愛花周氏曾留說、種實韓公亦有詩。愧我久爲糊口者、唯知咀嚼豈非癡」（「食藕」）『圃隱集』巻一）。

（12）李集は鄭相国と詩のやり取りをしていた。その鄭相国は鄭道傳を指す。鄭道傳もまた「景濂亭銘後說」（『三峯集』巻四）に「濂溪之

言曰蓮花之君子也。……苟知蓮之爲君子、則濂溪之樂庶乎得矣」と述べている。また、李集は韓脩（一三三三～一三八四）と詩のやり取りをしている。韓脩の『柳巷詩集』には「七月初有日、往藉田田舍、荷花始開、使人奉邀牧隱先生、先生以疾不至、更其予副使垂示佳作、依韻奉答」二首、「七月晦日、欲陪牧隱先生同往賞蓮、先生又辭以疾、明日奉呈一絶」といった詩題が見られる。郭預（一二三二～一二八六）の子孫であるが、郭預もまた「蓮」を好んでおり、「其在翰院、毎雨中跣足、持傘獨至龍化池、賞蓮、後人高其風致、多詠其事」（『高麗史』巻一〇六、列伝巻十九、郭預）といった逸話が残っている。李集の「遁村先生雑詠序」を書いた河崙の「不毀樓記」（『浩亭集』巻二）に「又於樓南、引水爲池、種蓮其中」と、鄭摠の「盆蓮」（『復齋集』上）に「我居眞是退之詩、汲水埋盈作小地、蒲葦數叢蓮數葉、悠然江興雨中知」とあるなど、多く見られる。また、權近の「盆蓮」（『陽村集』巻十）に「庭畔難開沼、盆中可種蓮」とあり、池や沼を作るのが難しいので盆に蓮を植えて観賞すると述べており、盆に蓮を植えることをうたった詩文も見られる。さらに、李集の師である李齊賢（一二八七～一三六七）は「君子池」と題した詩文を作っており、また彼の詩文の中には、「花實同時、不染淤泥。有似君子、見愛濂溪」（「沔州池臺堂亭銘、君子池」『益齋亂藁』巻九下）と述べられている。前掲『韓国古典詩に見られる隠逸の心とその生活』参照。

（13）前掲『韓国古典詩に見られる隠逸の心とその生活』参照。

（14）李穡は、「驪江四絶。有懷漁父金敬之。」（『牧隱詩藁』巻九）詩の第一絶の春に「群花爛熳炫晴空、一箇釣舟明鏡中。不是綠蓑青蒻客、誰知細雨與斜風。」と詠っている。李穡は金敬之を「綠蓑青蒻客」と張志和に比喩して、金敬之が張志和のように漁父の隠居生活をすると述べている

（15）「風流千載説歐蘇、同宴西湖樂以娛。安得從公一觴詠、驪江風月勝西湖」（「寄呈宗工鄭相國」）、「登臨絶巘意超然、無限山川共眼前。箇裡分明堪畫處、黄驪最占好江天」（「與同年任深父。登寶德峯頭」）など、驪江の自然の美しさがよく表れている。

（16）「次敬之舟次詩韻」に、「清波瀲灩沒中洲、一葉輕舠泝碧流。若使老夫偕載去、傍人解道李膺舟」「夜深衣露灑霏微、閑棹孤舟訪釣磯。柴戸半扃人正靜、呼童還向月中歸」とある。これに「黄鶴樓前鸚鵡洲、煙波渺渺望中流。却憐二叟同遊處、兩岸青山一葉舟」と牧隱が附次韻した。「病中寄敬之」に惕若齋が次韻した詩には「結屋應須近水濱、門前苔徑接青蘋。蘭舟桂棹同游慣、蓴菜鱸魚共食頻」とある。また、「次敬之韻」四首の第四首目の結句に「江月乘舟須載酒、山秋遊寺卽煎茶」とある。「寄呈牧隱三首」に「眼前白鳥蒼波闊、欲理偏舟更憶君」とあり、李集が偏舟を漕ぎながら李穡を思う感情が述べられている。李集は自ら船に乗って出かけたり、惕若齋と一緒に出かけたりしたのである。また、「寄呈原功相國」に「夢裏依俙氷雪容、幾回相對月庭中。他年江海如尋我、寶德灣頭問釣翁」とあり、「寶德灣頭問釣翁」と言っているように、釣翁生活をしていたことも窺える。

（17）金九容は竹州に左遷され母郷に移ってからの生活が七年間続いた。その後、一三八一年に左遷から官職に戻り、左司議大夫を授かっている。このことから金九容の志は黄驪の水辺に住むことよりも他に官職への未練があったことが考えられるのである。

（18）『孟子』（離婁）に、「有孺子歌曰、滄浪之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足、孔子曰、小子聽之清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也」とあり、漢の趙岐の注に「孺子童子也小子、孔子弟子也清濯所用、尊卑若此、自取之喩人、善惡見尊賤、乃如此」とある。孟子の言葉と、浩然を号にしていることから考えると、船に乗ること、漁父を想起させることについて、李集は孟子の滄浪歌を思い浮かべ

ていたのかもしれない。

(19) 李必亨は「先生還自嶺南寓居川寧江舍、與枕流亭六友堂惕若齋相近、朝夕對話以終老焉」(『遁村先生遺稿』巻四) と記す。

(20) 李集の「黄驪江」詩に「一帶長江繞郭斜、樓臺如畫是人家。看盡船頭兩岸花、如何一本作何如。狂豎焉知大義斜、宰臣憂國便如家。江頭游女猶多事、緩緩行歌陌上花」と述べられている。美しいところであるが、政事を行う人の乱れた場所に変わっていくことを嘆いている様子が窺える。また、禑王の即位後、権力を握った李仁任は親明政策を行い、北元からの使臣を迎えようとした。それに反対した鄭夢周、李崇仁、金九容、田祿生などが左遷された。これらのことからも、李集は友人たちが禍を被ることに心を痛めていることが分かる。政権に対する失望は甚だ大きかったことであろう。

(21) 前掲『韓国古典詩に見られる隠逸の心とその生活』第三章と重複するところがある。

(22) 前掲『韓国高麗時代における「陶淵明観」』第三章参照。

(23) 『宋書』「隠逸伝」の陶淵明伝に「郡遣督郵至、県吏白應束帶見之、潛歎曰、我不能爲五斗米、折腰向鄕里小人、解印綬去職、賦歸去來」とある。李集の「孤松亭會同志士聯句」に、「珍重無瑕玉、浮沈不染藍」と述べられており、李集の世俗に染まることのない真っ直ぐな心が窺える。

(24) 孟浩然は四十歳になっても俸禄がなく、田園で農耕生活を送っていたが、四十六歳の時に、山南道採訪使韓朝宗の推薦を受けて一時官職に登用される機会を得たが、応じなかった。孟浩然は科挙に合格することなく、不遇の生活を送ったために不朽の詩を残すことができ、不遇な放浪生活が孟浩然独自の船旅の詩を生み出す一要因になったと思われる。(前掲『韓国古典詩にみられる隠逸の心とその生活』第三章参照)